小野太三郎と横山源之助（上）
――明治中期における慈善事業近代化への相克――

The Conflict between Tasaburo Ono and Gennosuke Yokoyama
－Process to the Modernization of Social Welfare in the Middle Meiji Era－

山田　　明*
Akira Yamada

はじめに

小野太三郎による窮民救助の事業は明治維新後の日本を代表する慈善事業の一つであった．このことは，明治14年に制定された褒賞規定による慈善事業家受賞の第1号として，小野太三郎が明治18年に藍綬褒章を受けたことにも示されている[1]．また社会局社会部による『本邦社会事業概要』（大正15年）も小野慈善院を「現在の救貧院中最も古きもの[2]」としてあげている．

小野慈善院はこのような歴史的位置をもつ事業でありながら久しく研究対象とされることなく，近年になって池田敬正氏によって本格的研究報告がなされたくらいである[3]．筆者も10年前から小野慈善院史の調査をしているが，遅々たる歩みの中で，小野太三郎と横山源之助の明治30年6月から34年2月に及ぶ変転を含んだ相互交渉に関する史料を得た．この事実が単に両者の個人的齟齬にとどまらず，わが国慈善事業の近代化に関する相克を含んだものであるとの知見を得たので，その詳細や歴史的意味について報告するものである．

1．横山源之助の小野太三郎への接近と訣別

（1）下層社会研究と「北陸の慈善家」

横山が小野太三郎やその事業についてはじめて書いた報告「北陸の慈善家」を島田三郎が卒いる『毎日新聞』に発表したのは明治30年6月23日，25日であった．横山は『日本之下層社会』（明治32年4月刊）に代表される下層社会研究の一環として地方下層社会の探訪調査を行っているが，その第1次調査ともいうべきものが明治29年3～4月に探訪した桐生・足利地方，第2次調査が同年9月から30年5月の郷里富山地方，第3次調査が富山県魚津を出て金沢，福井を経て関西地方に及ぶもので[4]，金沢に立ち寄ったのは第2次調査と第3次調査の途次であった．

5月末金沢に着いた横山は北国新聞社主赤羽萬次郎を「病中来客謝絶」の新聞広告の出ている中を見舞い，話の中でたまたま金沢の名人物として考証家森田柿園，僧雪門，慈善事業家小野太三郎を教えられた．宿に帰って主人に小野太三郎について尋ねると，「亦た口を極めて賛嘆し，金沢人にして知事の名を知らざる者あるも小野氏の名を知らざるものなしと語る」ほどで，次の日に小野を訪問し，留守のため翌6月1日に4～5時間面談している．その報告が前記「北陸の慈善家」であるが，ここで横山をこのように動かしたものは何だったのか．

赤羽社主が3人を挙げたのに対して，横山が

* 児童学専攻

その翌日に早速取材に赴いたのは小野太三郎で，他の二者については不明だが，雪門にはその後太三郎の事業のことで相談している．このように横山をして小野太三郎に最優先の関心を抱かせたものは何だったか．

第1に考えられるのは，赤羽の小野太三郎を推奨する熱意の強さである．横山は明治33年10月に富山の新聞に小野太三郎を紹介した中で，「故赤羽氏の如きは余輩に語るに金沢人は兼六園を以て誇るに足らず九谷焼も誇るに足らず唯独り小野太三郎一人の存在は金沢人の以て他国人に誇る所なりと称せること有りたり（中略）赤羽氏の言ふ所亦た敢て誇張に失せさる可し」と書いている[5]．最後の部分の小野太三郎評価は30年6月時点のものでなく，その後の交渉の中でのものであるが，前半部分の赤羽の小野評価はこの5月末の横山，赤羽会談時のものである可能性が高い．赤羽は31年9月20日に病没するが，横山が赤羽と接する機会があったのは30年5月末から6月前半までである．この間に赤羽に再会したことも考えられるが，その場合でも，初回会談時の赤羽の高い小野評価が何らかの形で現われでたとみる方が自然だろう．赤羽がなぜこのような小野評価をしていたかは次章で考えることとして，横山が赤羽の小野評価に動かされた可能性の大きいことはまちがいないと思われる．

第2に考えられるのは，横山が貧民問題や慈善事業に関心をもっていたこととの関連である．明治4年生れの横山が郷里魚津を出て弁護士になるべく上京した後に二葉亭四迷を訪問しはじめたのが明治23～24年で，当時「貧民窟探訪にうきみをやつしていた[6]」二葉亭や，そこで知りあった松原岩五郎の影響をうけて貧民研究の世界に踏みこんでいく．27年に『毎日新聞』に入社し，同年12月にはじめて記事を執筆しているが，翌28年2月に施設訪問記録「養育院」を天涯茫々生の筆名で発表し，その前後には彷徨子の筆名で「孤女学院」「我国の感化事業」「職工徒弟学校」「女子授産場を紹介す」を発表している[7]．すなわち毎日新聞入社直後に貧民問題調査と合わせて慈善事業の視察を行っていることは，少なくともこの慈善事業視察を通して横山が慈善事業に対する何らかの問題意識をもったろうことを考えさせる．そしてそうであれば，先述のようにすでに全国的に名を知られていた小野太三郎の慈善事業についても何らかの積極的関心をもっていた可能性がある．

「北陸の慈善家」は『日本之下層社会』中の第一編東京貧民の状態の末尾に，小林授産場を取材した「大阪の慈善家」とあわせて付録としてつけ加えて再録されている．その再録の文頭に横山は以下のように記している[8]．

> 世に慈善家なる者あり，既に名顕われて実の伴わざる者あり．草深き田舎に大徳の君子を見る事あり，虚か，実か，余嘗て毎日新聞紙上二人の慈善家を記るせり．左に附記して読者の一粲を博す．余輩は今日日本の現状に於て，貧民問題の解釈者として深く慈善家を待つ者也．

名のみ顕われて実の伴わない虚名慈善家に対するきびしい批判を，横山はすでに28年5月の毎日新聞記事「社会の観察」においてしており[9]，その同じ問題意識から「北陸の慈善家」等を再録したことがうかがえる．そして小林授産場（明治18年設立）の方は小林佐兵衛に会えないこともあってか視察記事の域を越えていないが，小野太三郎については随所に小野に対する人間的感銘が表明されている．その顕著なところを番号を付して引用すれば次のようである[10]．

> ①余は路すがら其の風采を想像し，余が畏敬する人の容貌は如何なるべきか，如何なる容子にて応対やせんなど，種々空想を頭脳に浮かべ，トある小室の前に至れる時，跣足にて汚れたる短き股引に，同じく汚れたる襯衣一枚の一野夫出でて，余が前に恭しく挨拶を述べたり，是れ北陸の名物，独力にて六百有余の窮民を養い居れる一大慈善家小野太三郎にてありしなり．
>
> ②氏極めて謙譲，自己を吹聴すること深く之を避くるを以て，其の詳細は聴くを得ざりし

と雖も，人の語る所によれば実に近年まで窮民の死する，氏自ら之を舁(かつぎ)て之を埋葬し而して其の棺及び墓標は手づから之を製せり．元旦死せるものあり，自ら棺を負い灯を提げ将に城北臥龍山に葬らんとす．夜昏く雪深く滑倒数次，棺開け，屍露わる．辛うじて薦を解きて之を包み竟に葬り了れりと．曽て浅野川の辺に死せる者あり，貧窶にして之を葬ること能わず，氏を訪うて情を訴う，乃ち手づから棺を製し其の家に到り将に棺に納めんとすれば，死者吐血夥しく，其の妻すら尚お近づくを肯せず，氏親ら屍を抱きて之を検し流涕して葬れりと．斯の如きは氏に於て平常の事なり．

③対話四，五時間，氏と共に昼飯を喫し，小屋を出づれば余が下駄に水の滴り居れるを，氏周(あわ)章てて手づから拭い，往還に出づるまで見送れり．

横山は小野の事業について聞いた時点ですでに感銘を受けて畏敬の念をもっていたが，直接にその粗末な姿に（①），そして人に対するにあくまで謙譲，献身的な人間性に接し深く心を動かされ（③），伝聞ながらも死者に対する誠実そのものの姿勢にも感動しているのである（②）．「都会の人よ，記憶せよ．北越の慈善家，小野太三郎氏は実に斯の如き人なり．齢五十八」としめくくるその記事からは，慈善家の理想像を小野太三郎に見，そのゆえにこそ『日本之下層社会』中にやや不自然な形であっても「北陸の慈善家」を挿入して，貧民問題の解決者の一つとしての真の慈善家の輩出を期待した横山の課題意識が感じとれる．

（2）労働運動参加と「北国の二名物」

横山源之助の貧民研究の関心範囲は相対的にみて広かった．『最暗黒の東京』を書いた友人松原岩五郎らの先行貧民探訪記者の関心が貧民街などの貧窮民に限られがちであったのに対して，横山の問題意識は労働者や小作人にまで広がるものであった．横山による各地の下層民調査の対象も以上のような広がりのもとで選定されている．その延長上に横山の労働運動に対する積極的関心と参画があった．高野岩三郎，片山潜らによって労働組合期成会が結成されたのが明治30年7月であるが，横山はその初期から参画し，機関誌『労働世界』への執筆もきわめて多い．

ここでは同会を母体にして片山潜，横山の発起により31年4月に貧民研究会が作られたことにふれておかなければならない．その動向を整理した立花の研究によれば[11]，メンバーは本郷真治郎，片淵啄，松原岩五郎，山室軍平，布川静淵，松村介石，片山潜，高野房太郎，安達憲忠，横山などで，他に原（胤昭か），植松孝昭，副島，幸徳秋水，井上慶吉，石川安次郎などの名が見える．研究会でとりあげられた内容は各地貧民の生活状況などに加えて養育院，貧民救助所設置の立案などが記されている．この研究会は3ヵ月間に3回の研究会を開いたのみで長続きしなかったようだが，横山が安達，原，布川らの慈善事業関係者と相識であること，貧民救助所のあり方を討議していたことは興味深い事実である．31年段階で単に慈善救済事業の視察経験をこえる貧民救助のあり方やその一方法としての救助施設のあり方についてある程度まとまった問題意識をもっていたと考えることができるからである．

ただこの貧民研究会は慈善事業界の中枢と直接つながるものではなかった．しかし一方で横山は労働組合期成会の主流につらなる人脈をもっていた．それは労働組合期成会結成時の一方のリーダーであった高野房太郎であり，氏を通して知遇を得たと思われる桑田熊蔵である．後に述べるように明治32年8月に横山は病を得て魚津に帰りその地にとどまることを決心するが，それを措しとして中央復帰の道としての農商務省の工場調査の調査員嘱託の仕事を斡旋したのがこの2人であった[12]．そして桑田を通してわが国の明治後半期以降の救済事業近代化のリーダーとなる窪田静太郎と出会うことになる．

さて横山は『日本之下層社会』『内地雑居後の日本』の執筆・調整や労働運動への参加の中

で過労で倒れ，明治32年８月に東京を発ち，金沢を経て富山魚津に帰る．以後34年３月に再上京するまで一時的上京を除いては金沢，富山にとどまり，静養と調査活動をした．その生活や活動は大まかにしかわからないが，32年夏は金沢各所を訪問し，秋から翌33年春までは魚津の町はずれの山中の心蓮坊に閑居し，時に村役場に出かけて東京の新聞を読む程度の生活をしている．この間に，次にとりあげる「北国の二名物」を読売新聞に発表している．33年８月に桑田熊蔵からの手紙により富山で窪田静太郎に会い，氏から小野太三郎の様子を聞き，直ちに金沢に小野を訪ねている．この時同時に工場調査の責任者でもあった窪田から工場調査調査員嘱託の仕事を委嘱されたのではないかと思われる．横山担当の工場調査は同年10月から翌34年３月までの間に行われ，再上京ということになるが，実はこの時期に重なって33年10月から12月まで横山は，後述するように小野太三郎の無縁塔建設運動に最大のエネルギーを注ぎ，その過程で小野との葛藤が強まり，やがて訣別していくことになる．本稿の本論ともなる事態がそこにある．

そのプロセスをみるためにはまず明治33年１月発表の「北国の二名物」をみておかなくてはならない．この記事は新潟新聞主筆越智修吉を介して読売新聞に掲載されたもので，横山の稿料稼ぎの一つでもあったと思われる．そこでは32年夏に取材面談した金沢の２人の人物，慈善事業家小野太三郎と布目塗の鶴田和三郎が各３回計６回に分けてとりあげられている．この記事で横山は小野の事業の来歴，現状に加えて，経営状況を詳しく聞き，仏教国北陸の市民の協力をつよく訴えている．すなわち「余ハ小野氏の事業を見，其の前途を思ふ毎に，我が仏教徒の事実に於てハ，極めて社会事業に冷淡なるに呆然たらずんばあらず」と嘆き，１カ月の所要経費111円に対し11円しか確保されていない状態の解決を訴えている[14]．またあわせて横山は小野の事業の前途を憂慮する前引記事に加えて次のように言う[15]．

余ハ老の慈善事業にハ，幾多の不満足を抱く，然れども親しく老に接し，其の来歴を知るに及んでハ，転(うた)た敬畏の念なき能はじ，老の頭脳にハ，社会事業として何等の珍異なる思想ハなからん，然れども其の貧民に対し，孤児に対し，理屈によりて之を憐むにあらずして，直に其の境遇に同情し，何とハなしに之を憐れみ，身を以て之に接するが如き献身的行為あるもの，澆季(ぎょうき)の今日，果して幾人かある．世間にハ口に筆に貧民救済を論ずる者無数，然れども口之を称(とな)へず，筆之を論ぜず，蔽衣粗服，四十年一日の如く，鳩翁道話，孝経大義，経典余師を心に体して貧民事業に従事せる老が如きハ，余輩ハ稀に見るの徳行家なりといふを憚らざるなり．

事業の現状には多くの問題を感じながらも小野の献身的行為と実践倫理に慈善家のあり方の模範をみているのである．またその経費面の苦労に対しては「余は転(うた)た老に対して気の毒の感なき能はず[16]」と深い同情さえ示している．横山は「北陸の慈善家」においてもすでに「蓋し氏の慈善事業は，之を一の社会事業としてみれば，今日或は種々の欠くるものあらん[17]」と述べ，その現状に問題を感じていたようである．２年後のこの時点では経費面の詳細を知り，小野太三郎が慈善事業についての知識をもたず，仏教的道義心によった事業であるだけに，「其の前途を思ふ毎に」「敢て北国人の奮起を望む」[18]と市民に問題解決への参加をよびかけたのである．問題の基本は十分協力しない北国人にあるともとれる訴え方だった．

（３）無縁塔建設運動への参加と撤退

この後小野太三郎の事業である小野救養所はさらに深刻な困難に直面する．その詳細は次章の課題であるが，そのきっかけは明治32年11月26日に太三郎の妻セン（泉子）が死亡したことである．横山が32年の夏から秋にかけて何回か小野を訪問した時点ではセンはさしたる異変に直面していなかったのではあるまいか．仲秋の明月の夜に横山が僧雪門を太三郎とともに訪ね

ている記事からすると，少なくとも９月15日までは上述のようであったといえよう．横山は多分この後魚津に帰り小川心蓮坊に入ったのであろう．そして33年１月に「北国の二名物」が発表されるが，人の手を介しての寄稿であったので，セン死亡以前の執筆で加筆の手は入らなかったのであろう．

横山は病気ゆえの郷里魚津への隠遁であることを小野に話したのであろう．静養先に何回か小野からの見舞いが届けられ，親密の度を増していった．そして心蓮坊に閑居している時にセン死亡の知らせを受け，長文の悔みの手紙を出し，小野太三郎からの返書を受け取っている．しかしセン死亡後の小野の事業の惨状や太三郎の変化も知らず，そのまま翌33年７月まで時が経過した．７月下旬に上京したその頃に桑田熊蔵から手紙を受けとり，富山市衛生大会に出席する予定の窪田静太郎に会うことを勧められている．８月９日に富山ホテルに窪田を訪問し，農商務省職工事情調査調査員嘱託のことと思われる話をし，「談話の序(ついで)に小野老の衰弱し老耄せるを知り，大に驚き[19]」，その２～３日後に小野を見舞ったことは先述した．その時の様子を横山は次のように書いている[20]．

窪田氏の言の如く昨年の老とは大に異なるを認めたり而して余の最も注意を惹けるは煙管を出して煙草を吸ひつつあること是なり怪みて仔細を質せば憂を煙草によりて忘れんか為めなりと答へて悄然たり老と交はりたる者は之を知るべし老は極めて快活の人なりき興に乗せば謡曲を謡ひ義太夫を語ることあるは能く人の知る所なり今日の老に於ては斯の如く「快活」「無邪気」「小供らしき所」は殆ど見ること能はざるなり余の帰途に就かんとするや例の如くステーション迄送り来るも路々相語ること少なく待合場に在りと雖とも別に惜別の様子だもなく茫然として空打ち眺めつつあり（中略）彼は近日に至りて一種の妄信を懐きつつあり即ち来年盆を過くれば己れ亦妻の後を追ふて死亡すると言ふ

ここには妻を亡くして茫然自失，生きる意欲をも失った小野太三郎の姿が描かれている．

こうした小野太三郎の状態と直接間接に関係しながら明治33年夏頃から無縁塔の建設を推進する動きが富山の石動方面で始まった．その最初の新聞報道をやや長くなるが運動評価をめぐる重要資料なので示しておく[21]．

金沢市の慈善家小野太三郎氏の祖先は世々西礪波郡五位山村大字小野村に住し太三郎が父の代までも同地に居住しつつありし縁故を以て氏が慈善事業に手を着けし以来石動町界隈の貧困者にして氏の救護に預かりしもの頗る多く従って救護中死亡したるものも数十名に及びたる由なるが今回石動町の有志中村市五郎氏の発起にて小野氏の紀念碑を建設し之れと同時に該死亡者の無縁供養を営まんとて昨今専ら奔走中なるが来八日を以て各有志を糾合し其協議会を開く筈にて同日は特に小野氏を招聘して慈善事業に関する一場の談話を乞ふ都合なりといふ

この記事にはこの後の混乱をひきおこすいくつかの要素が示されていた．その最大の混乱要素は石動町有志がこの運動の発起人だということである．そして無縁塔建設運動と石動町を結びつけたのが，記事中にもあるように太三郎の父が小野村の生まれだという事実である[22]．そもそもこの無縁塔建設運動は誰が言いだしたか，またその運動の中心的担い手は誰になるべきだったか，ここに混乱の発端があった．

横山は８月に小野太三郎を見舞った折に小野が無縁塔建設計画をもっていることを知り，「其の言語態度に依りて余に其運動を依頼せる者と信じ」，雪門禅師に富山県氷見郡在住者の紹介をうけたことを太三郎に話し，その時にはじめて太三郎から石動町に無縁塔建設運動があること，その中心になっている者の氏名を知らないことを聞かされている[23]．横山は石動にその人を尋ねあて，協議をしながら精力的に無縁塔建設運動を組織していくが，そのことが横山に対する誤解と誹謗を生み，やがては徒労感の中で運動から手をひくことになる．横山はこの経緯を「無縁塔建設苦心談」として『北国新聞』

に９回に分けて掲載している（明治34年１～２月）．ただ掲載紙の残存状況から１，２，６，８，９回分しか確認しえていない．

先の引用記事にもあるように10月８日に小野太三郎，横山源之助も石動に赴き，建設運動の進め方が話し合われた[24]．そして直ちに横山にできる行動を開始した．その１つはこの無縁塔建設運動を広く県民に訴えることであった．「小野太三郎老を紹介す」という長文の記事を書き，小野太三郎の人物，来歴，現状を詳しく示し，富山県下各紙に寄稿した．当時県下の中心紙は富山日報，北陸政論であったが，前者はこの時期の数ヵ月分が県内外に保存されておらず確認できない．以下は北陸政論により運動の動向を追う．

横山は上述の長文記事で富山県人に，「此の金沢の名物たる小野太三郎老は是れ最も人物に欠乏し居る越中出産の人たることを余輩は先ず読者に記憶せられんことを望む[25]」と富山県人であるがゆえに同情を示すよう訴えた．さらに続けて太三郎の妻センが救養所を支えるために内外両面で献身してきたことを述べ，その最愛の妻を失った太三郎の悲哀を示し，さらに最後につけ加えて「老は本年六十一歳にして所謂還暦の●（裏字，齢の誤植か）や而して本年に入りて急に無縁塔建設の計画を発起せるもの蓋し之あるが故に非らさらんや[26]」と太三郎の高齢への理解をも訴えている．全体を通して小野救養所の悲惨な現状を解決するための協力訴えというより，太三郎の心情およびその具体化としての無縁塔建設への協力をよびかけるものであった．

横山にできることの２つめは東京での知人，名士らに無縁塔建設への協力を訴えることであった．多分各方面に直ちに手紙を出したのではなかろうか．11月に入ると協力受諾の返信が集まり始めたようである．11月16日付北陸政論は無縁塔建設賛助員となることを承諾する旨連絡があった者として，貴族院議員伯爵日野資秀，工業学校長手嶋精一，東京帝大教授金井延，同戸水寛人，内務省参事官窪田静太郎，農商務省嘱託桑田熊蔵，元真宗大教授清沢満之をあげ，他に賛助を求め返事待ちの者として西園寺枢密院議長，金子，末松，渡辺各大臣，近衛貴族院議長，板垣，大隅両伯爵，尾崎，嶋田，河野，田口等諸名士としている．同11月20日付では東京養育院長渋沢栄一，同院幹事長安達憲忠，北米労働団体代表高野房太郎，社会主義研究会会員畦嶋敏，大内青巒，二六新報記者権藤震二，萬朝報記者幸徳秋水が承諾した旨伝えている．また11月21日付『北国新聞』（金沢）には以上の他に元「仏教」主筆多田鼎，暁烏敏の名がある．北国新聞に無縁塔建設関係の記事が掲載されたのはこの時がはじめてである．また両紙は11月20日に早稲田の大隅伯邸で開かれる瓜生四恩会で参会の貴婦人に対して『東京評論』記者中村諦梁が横山に代って小野太三郎の人物事業を紹介して賛助員を募集する手筈だと伝え，その仲介をしたのは安達憲忠だと述べている．この後34年３月の記事においても「爾来続々賛成者ありて今より頻りと寄附金の申込者もあり東京某有力者より支部設置を申送りたるも幹事会に於ては事務整理の都合上当分見合せのことに協定したるよし[27]」と賛助員応募の動きを伝えている．横山の働きが東京でかなりの反響をよんだことがうかがえる[28]．

この時期に横山は二葉亭四迷に一通の手紙を出している（33年11月9日か）．そこで無縁塔建設運動について次のようにふれている[29]．

小生目下大奔走致居候無縁塔着々成績ヲ収メ居候　大喜ヒ被下度候　小生社会ニ出タル首途ニ多少成績ヲ収メントスルハ快限ナク候但シタトヒ一小事業ト雖モ種々ノ齟齬モアリ蹉跌モアリテ時ニ腹ノ立ツコトモ多ク候ヘ共小生此頃心機一転候者カ案外ニモナカナカノ楽天家ニ相成候得者トシトシ社会ノ抵抗ニ相勝チ居候

運動の中での齟齬や蹉跌があることを述べながらも，病後の社会復帰第一歩の仕事として位置づけていることや，困難に向かって努めて楽天的たらんとしていることがわかる．

しかし横山がこの運動の中で直面した困難は

運動の進め方をめぐる齟齬だけではなかった．小野太三郎その人に対する不信感が次第に募ってきたのである．太三郎との衝突について横山は次のように述べている．本稿にとってもっとも重要な点なのでやや長い引用をお許しいただきたい[30]．

余は前に述べたるが如く，小野老に対しては無限の同情を有し，尊敬を払い居る者也今日救貧事業に従へる者何ぞ老一人に止らんや，東京には最も文明的組織を示しつつある東京養育院々長渋沢栄一男あり，富（ママ）（岡か）山市には千辛万苦を経て今日最も成績を致せる富（ママ）（岡か）山孤児院々長石井十次氏あり，秋田市には旧日本が遺せる慈善財団中最も見るべき好模範たる感恩講の相続者那波三郎右衛門氏あり，是等は皆な余輩の欣慕措かざる人にして我国慈善社会のオーソリチーたり我小野老は，是等の人に対して固より学殖あるにあらず，品性の高尚なる者あるにあらず，其の救貧場は，極めて不規則千万にして，教育の方法なく，衛生の注意なく，場内取締の如きも寛厳策なく一に自己の喜怒に依りて監督の標準と為すが如きを知れるを以て仮令余輩と雖も老の事業に就きては世人に譲らざる遺憾を懐き居る者也，然かも余は老に対して尊敬の念止む能はざるは根気の強きにあり，理屈を以てせずして直に心情より孤児貧民を愛するにあり．若し此上よりして，今日各地方に在る慈善家を月（ママ）（見か）亘せば，恐らくは老の如きは最も称すべき一人たるは余輩の信じて疑はざる所也．蓋し政府が老の功績を認めて藍綬褒章を与へた□（るか）は，余の解釈を以てせば其の根気と熱誠とに酬いられたる者と言ふを得べき歟，余は以上の如き尊敬を払ひ居れるにも拘らず，屢々余と老との間に衝突あり，遂に金沢市に在りては雪門禅師，石動町に於ては牧井平助隠居の立会を請へるが如きことありたるは，余の甚だ老の為に遺憾とする所にして，且つ顧みて余の不徳を恥づる者也．

蓋し老は数十年間金沢の天地にありて普く社会の進運を知らず，換言せば老は彦三二番丁の方数百坪の建物以外に博く人と交るを避けつつあるを以て其の弊や流れて固陋と為り偏見と為り邪推に富むに至る，特に慈善事業の如き，余りに不規則余りに不取締なるを以て余の如きは常に東京養育院の例を語り，欧米慈善事業の実情を説きて其の反省を求めたること今に数十回なりと雖も，耳之に傾くれども心之を解せざるを奈何せん，一昨年老妻を失せる以来，特に性急となり，狐疑の念すすみ，或時は殆ど人言を弁ぜざることあり，余の件の事業に会する毎に其の人場者を憫むと共に，窃に老の心理的異常に且つ驚き且つ痛み，并びに詩人的想像を以て同情の念止む能はざる者なり．

読者よ，余を以て老人を褒むる者と為す勿れ，貶する者と為す勿れ，余は真実を語るのみ，老と余との衝突ありしが如きも，必意するに旧主義と新思想との衝突のみ（中略）今や無縁塔期成会は成れり，既に幾多の賛助員を東京及越中地方に得たるを以て幹事諸君にして多少の尽力を加へば労せずして若干の金員を得ん，小野老人，意を安んじて可なり．（括弧内山田，□は判読不能）

ここで横山が批判していることは小野の慈善事業の生活という点からみた劣悪性，運営面からみた諮意性・不規則性，他の諸事業や知見から学ぼうとしない非科学性，時代の変化に対応しえない守旧性などであり，総合していえば前近代的運営ということになろうか．横山はとくに東京市養育院と比較しながら慈善事業のあり方について小野太三郎にくり返し提言しその改善を求めたようである．しかし太三郎は他の慈善事業をみて自らの事業の向上を期するという発想をもっていなかったともとれる．後述するように金沢市内にも金沢育児院のような先進的な慈善事業もあったが，小野太三郎は見学に出かけたり経験交流をして自らの事業の問題点をとらえるという作業をした形跡がない．

しかし時代はそうではなかった．すでに明治20年代後半から慈善事業に対する疑問や批判が出されはじめ，あるべき慈善事業はどのようなものかが問われてくる．横山もちょうどこの時代の中に位置したが，30年頃はまだ倫理的見地から評価していた．しかしその後次第に時代の中で高まってきた慈善事業科学化の動きや各種慈善事業の組織化の動向にふれ，慈善事業の近代化を志向する風潮の中に自らをおくようになっていく．横山のことを終始心にかけ，大きな影響を与えた桑田熊蔵らが明治29年に社会政策学会をつくり，貧困対策を主要対象の１つとした社会政策のあり方を模索しはじめる．留岡幸助はハワードやペスタロッチに学びながら明治30年に『感化事業之発達』を，翌31年に『慈善問題』を著し，同年暮にはその理論の実践の場として家庭学校を創設している．その名称も含めて，理論に裏づけられた実践の開始を象徴する一事である．32年頃には窪田静太郎，桑田熊蔵，留岡幸助，原胤昭，小河滋次郎らを中心に貧民研究会（横山らが31年に作ったものとは別）が作られ，中央慈善協会設立につながる慈善事業の組織化がスタートする[31]．慈善事業の近代化・科学化が本格的に求められはじめた時期に横山は小野太三郎に深く関わっていき，横山自身が桑田熊蔵や安達憲忠らを通して感じていた慈善事業近代化の課題を横山なりの言葉で小野太三郎にぶつけたということであろう．しかし結果は先に引用した横山の小野への訣別の辞ともとれる苦渋を含んだ批判としかなりえなかった．またこうした新しい思想潮流を受容するだけの学問的素養も精神的若さも小野太三郎には備わっていなかったともいえる．その意味ではこの両者の出会いは双方にとって軋轢と葛藤を含まざるをえないものであったということができよう．

２．小野救養場の発展と衰退

横山源之助が小野を訪れ，交流を深め，運動に参加し，やがて別れていった明治30年から33年という時期は，何とか維持されてきた小野太三郎の事業が小野の高齢化とともに活力を失って衰退し，混乱の度を増していったプロセスと重なっている．慈善事業の近代化がいよいよ求められた時期に小野の事業は新しい潮流に対応できないばかりか，それまで維持していた体制をも崩してしまう主体的条件しかもちえなかったのである．しかしそれは小野太三郎が何の努力もしなかったということではない．いくつかの努力をしながら日々の経営に追われ，社会的なサポート体制も弱いまま衰退していかざるをえなかった．その意味では個人慈善の限界を示す一例であったともいえる．以下では横山が交渉をもった時期に至るまでの小野太三郎の事業の展開を概観し，その事業がなぜ衰退せざるをえなかったか，その要因をさぐることとしたい．

(1) 明治20年代までの小野救養場

小野太三郎が貧民の収容保護を開始したのは元治元年（1864年）とも明治６年（1873年）ともいわれる．前者は金沢市中堀川の自宅（敷地14坪）においてであり，後者は木ノ新保一番丁19（49.2坪）で24人を収容した時期である．その後被救養者数増加のため北隣の木ノ新保一番丁20（53.8坪）を購入している．さらに明治12年頃には私費450 余円を投じて家屋６棟を購入，明治23年頃には彦三二番丁に２棟，堀川間の町，此花町，木ノ新保一番丁，二番丁，石屋小路に各１棟の計７棟を数え，収容者数240人に至っている[32]．ただこの記述は金沢市役所に残っている土地台帳とは合致しないところがある．家屋の規模は書類が残っていないので不明だが，土地の広さは確認できる．また金沢市街の古い街なみや古老からの聞きとりによると，ほぼ敷地いっぱいに平屋または中2階の家を建てるのが一般的だったようである．木ノ新保一番丁には２棟の家を隣りあって持っていたことになり，その広さは先述の通りであるが，小野太三郎は木ノ新保一番丁にさらに２軒合計４軒の家を持っていた．22番の１（45.2 坪），60番（21.5坪）である．木ノ新保二番丁26にも24.6坪の土地を持っ

ている．此花町31（10.26 坪）は土地台帳で確認できたが，石屋小路，堀川間の町には小野太三郎名義の土地は確認できなかった．彦三二番丁（364.13坪）は太三郎の妻センの実家である島崎家の土地で，センの父又右ヱ門が死亡したあと末子で長男の又吉所有となっていたが，実際は両家の区別なく使い，又吉も中堀川の小野のもとでくらし，救養場の手伝いもしていたようである．セン死亡の5ヵ月前の32年6月に小野太三郎と島崎センが中堀川31の土地と彦三二番丁の土地の交換契約証書を交わしている[33]．またこの土地に隣接していたと思われる同二番丁24の畑1反3畝を31年2月に30円で購入したことになっている．

この明治10年代半ばの処遇は，「自立自炊すること能はずして救助を仰ぐ者を（家屋数棟に）容れ各々応分の職業を営ましめ其得る所の金銭に私費を加えて充分庇護恤養せり」というもので，1棟で最大75人収容していた．また経営面では「僅に古着商を営み傍らに鋤鍬を執て田畑を作り其得る所を以て恤養の資料に充て」ていたという[34]．貧民にまず住居と食事，衣服を与え，あわせて職業を得られるよう技術と資金を与えていたのであろう．

小野の事業は少しずつ人の知るところとなってくる．明治11年には天皇の巡行に随行した役人がその実績を調べに来たが，太三郎はそれを避け謙遜している．しかし次第に広く知られるようになり，明治18年2月に藍綬褒章を受けたことは先述したとおりである．21年4月には石川県書記官が小野の事業を巡視し，同5月には戸長が小野の事業の近況を県庁に申告している．さらに同10月には曹洞宗長谷川天頴師が宗門の僧侶と相談して慈善追弔会を開き，同会に共潤会から1円が贈られている．同12日には石川崇徳会が創立1周年紀年会に太三郎を招待し，米5斗を贈っている[35]．また同月，石川県尋常師範学校男子部生徒一同が申合わせて拠金している[36]．22年2月発行の『共潤会雑誌』には先引のように「小野太三郎君の略伝」が3ページにわたって載り，同年3月号，4月号には「小野君軼事」が連続して載せられ，その業績が市内有識者に知らされた．また同年2月には共潤会3周年紀年第1回窮民賑恤会が盛大に開かれ，そこでも小野太三郎の名誉表彰会が開かれ，氏に米1石と盃が贈られた．さらに同年4月および6月にはそれぞれ曹洞宗大本山および真宗東本願寺法主から本山定紋付金襴打敷・扇子および法主親染和讃々文付六字名号が贈られ，その名誉がたたえられた[37]．4月25日には県知事ならびに同夫人から贈られた1円で救養している貧民200人を連れて金石浜へ浜遊びに行っている[38]．そして同年9月に真宗法主からの六字名号の披露をかねて太三郎が会主となって窮民死亡者追弔会が県書記官，金沢市助役ほか県内著名人300 余名の参加で行われた[39]．23年1月には小野太三郎が共潤会名誉会員に推され，2月には共潤会主催の第2回窮民賑恤会が盛大に行われるが，陸軍大佐，県書記官とともに太三郎が来賓として招かれ，米5斗と拾塵車2輌が贈られている[40]．4月には内国勧業博覧会に太三郎の写真と略歴が出品，6月には曹洞宗三香美思閑師によって窮民死者追弔施食会が開かれ，太三郎が陸軍少将と共に招かれている．またこの時期，県知事が書記官を伴って小野を訪れ，家屋修繕のため5円を贈っている．また7月には長谷川，三香美ら曹洞宗僧侶らが県書記官の賛助も得て共立慈善会をつくり，小野のために喜捨物を募ろうとしている．また同月には和田文次郎の執筆によって『小野君慈善録』全42ページが共潤会雑誌37号（23年7月）の付録として発刊された[41]．和田が数十日の時間と情熱を注いだ力作であった[42]．明治20年代初頭に小野太三郎の事業が急速に知られ，県のトップレベルの知名人として尊敬を集め，各方面から寄金もよせられたであろうことがわかる．全盛期ともいえる時期だったのであろう．

ではこの時期の処遇方法はどのようなものであったのだろうか．「貧民恤養方法概略」と題した，多分和田文次郎が太三郎から聞いて書き記したものを紹介しておこう[43]．

一、 貧民を住居せしむ各家庭内貧民中より

相当の者を選抜し該家内一切の取締を為さしむ

一、取締人は火の要心諸物品の保管等を掌り日々出稼する者帰宅の都合人別所持品を調査し万一不相当の物品を所有するものは事実を取糺し其旨を君に通知す

一．各自へ予め渡しある職業等の資金は毎日日没後調査を為し利益は人別帳に記載し其金円は帳冊と共に君に送ること

一，被救者（に）は定の白米其他食器を送り相当の衣類一枚及び日々風呂銭を給す

一，健壮なる者と認むる時は各自の望により其業を営ませ金五拾銭より多からず拾五銭より少なからざる資金を与ふ

一，各自日々得る処の利益金十分の一と各自平等一日一名に付金二厘宛を貯金と為し之れを衣類の費用とし自活する時の資金に充つ

一．前項の如く貯金の残りは全く一同の分を取纏め救恤費の方へ支弁するなり

一．日々の食米焚出人は各自順番を以て之を定む

一．十五歳未満の者は常にイロハを灰又は粉糟書を為さしめ試験の時暗記するを得し者へは男児ならは木綿単物一枚女児ならは相当の帯地を賞として与ふ

衣食住を確保し，職業と教育を与えること，それによって将来の独立自活に備えるというのが小野の処遇方法の基本となっているが，問題は管理や世話，教育を誰がするのかということと，この処遇に必要な資金をどう調達するかということだったと思われる．前者については太三郎やセンもその任にあたったであろうが，6棟余に分かれており，病人などもかなり多かったことからすると，この概略に記されたように，各家屋の中から1名取締人を選び，食事作りなどは当番制でしたろうこと，子どもの教育なども，被救養者中に没落士族も少なくなかったことからすればその中から選任したこともあったと考えられよう．しかし有能な被救養者を取締人に選任するという方法は，有能であるだけに独立自活して出ていく可能性が大きく，きわめて不安定な要素を必然的に内包している．

資金確保は取締人の安定的確保以上に困難なものだったと思われる．この時期になると古着商営業のことがまったく記されていない．10年代はじめには営業していたと思われるが，20年代にはその余力がなくなっていたのではなかろうか．畑が1反余あるが，そこで穫れる蔬菜で200余名の膳を潤すことはとても不可能である．外で働いて得た収入の10分の1と1人2厘（家族もちの場合には家族数分）を貯金し，他は全体経費にプールする，そのために毎日日没時に取締人が調査するという方法は，被救養者の相互扶助システムであるが，これを維持するためにはかなり高いレベルの道徳性が確保されていなければならない．そして現実には病気で働けない者が多数いて，一部の就労可能者に負担が集中し，さらに犯罪傾向をもつ者も少なくなく逃走者が続出していた．それでも寄附金が多ければ何とか維持しえたのではなかろうか．

この後の小野救養場の動向を明治26年に創刊された『北国新聞』（金沢）の紙面からみてみよう．26年8月の記事は市内島田某の妻（42歳）が「豫て発狂して近辺のものに迷惑を掛くることの屢なるに付此花町三十二番地小野太三郎氏持家に間締をなし夫々看護を加へありし」が[44]，身体衰弱し死亡したと伝えている．この記事によれば此花町の10坪余の土地は精神病者用の座敷牢で，あるまとまった人数が収容されていることがうかがえるが，いつから精神病者専用となったかは確認できない．明治12年頃以後収容者が増加し，その中の精神病者を分類隔離する必要からある時期にそうなったのであろう．10月には県知事が視察し5円を寄附している[45]．小野の事業がこの時期に広く知られ注目される存在であったゆえの県知事の訪問と解すべきであろう．3日後の新聞に太三郎は寄附広告を出し，県知事からの5円のほか，生菓子1500個，そうめん5梱，鯖1荷，鰯2荷が4人から寄附されたことを知らせている[46]．

27年5月には九谷焼等の製造販売を開始した記事と広告が載っている．すなわち「小野太三

郎氏方の貧民授産場にて製造する九谷焼物及木綿荒物等は今度本市大工町梅照堂に於て売捌くこととなしたる由なるが同場の製品は原料賃銀とも頗る低下なれば売捌代価も従ふて低廉なりといふ[47]」というもので，この時期に授産事業としての事業分野を強化したことがわかる．明治23年段階の就業としては人足，車夫，按摩，機織があり，他に煙草，飴菓子，八百物，玩弄物等の行商，笠紐縫い，肥料売買をあげているのみである[48]．これでみると外での就労，営業のほかに救養場内で機織，笠紐縫い，肥料作りが行われていたことがわかる．小坂與繁氏は他に桶，膳や茶盆，草鞋，草履，鳥篭，竹細工，木細工，マッチ箱張り，陶器製造があったことを記している[49]．たしかに早い時期から種々の家屋内作業が行われていたと考えられるが，先引のような積極的な販売活動が27年5月から開始されたということは，この時期の小野救養場の事業が「貧民授産場」とも称されるほど授産面で活発化したことを示している．28年12月には「九谷陶器等販売広告」と題して，九谷陶器のほか木綿手縞，手桶などを廉価販売する旨小野太三郎名で広告している[50]．この広告活動に向かう積極性が，内にあっては手桶などの授産種目の拡大にも向かったであろうことが想像される．小野太三郎がみずからの事業の積極的な方向づけをした時期として特徴づけることができよう．

こうした小野の事業の積極的展開とも関連しているのであろうか，後援活動，寄附金募集でも活発なものがみられる．その一部であろう，27年6月には共立慈善会が市民から醤油1斗，鰯500尾，同400尾，同1500尾，玄米5斗，白米1斗を集め小野に届けたことが記されている[51]．28年2月には小野太三郎のもとに県内外から酒5樽，反物7反，金2円，白米2斗，金5円，金75銭，金2円，酒3樽が贈られたことを太三郎が広告している[52]．共立慈善会がひきつづき活動中であることもわかるが，29年1月にはさらに新しい後援団体結成の記事が載っている．それは監獄の典獄および署員一同が奔走して結成し，金沢市内8宗の僧侶らが協力した小野賑恤会で，そこでは毎月毎年一定額を拠出する永久賑恤会員や時々の廃物等を贈る会員なとが考えられている．そして「同会の盛んに赴くと共に小野氏積年の労苦も幾何か其重荷を下すに至らんか[53]」と太三郎の苦労を広く分担しようとの姿勢を示している．と同時に同記事は反対派，賛成派の対立のあること，義損金の多寡について世間体を気にする向きのあること，そうした中で分外の拠金をしなければならないことを心配して会の成立を妨害する動きのあることを伝えている．この時のことを指すのか，あるいは次節で述べる慈善事業をめぐる県政のことであろうか，小野太三郎は前章で述べた無縁塔建設趣意書の中で，事業創設以来のことにふれて，「其の間幾多の曲節あり他人の妨害を受け疑惑を得候」と書いている[54]．ともあれ監獄関係者がこのように積極的な協力をした背景には，著しい病囚を小野救養場がひきうける関係などがあったと思われる．この小野賑恤会の他にも，「市内各宗の寺院より一寺に付き毎月五十銭宛を拠金して貧天地を保助して呉れ」ている[55]．これは死者の葬儀費用の一部にあてられている．それなりに積極的な支援体制が生まれてきていたことがわかる．北国新聞が28年9月に「貧天地主小野太三郎氏」と題した連載訪問記事を8回にわたって，当初4回は内ページであったものを後半3回は1面トップに掲載しているが，これは赤羽万次郎主筆の判断であると同時に県民の関心のつよさをも反映するものでもあったろう．

ところでこの明治28年秋の小野救養場はどのような実際だったのだろうか．上述の「貧天地主小野太三郎氏」から概観しておこう[56]．収容者数は180人であるが，援助している総数は6～700人に及ぶという．収容者の出身地は石川県はもとより新潟，福井，さらには遠く九州，四国，奥羽でも依頼があれば喜んで受け入れているとある．建物や敷地の状況をみると，記者は，東京や大阪の貧民窟のように「人々の鼻摘みして通行するが如き場所と異なり」，市街の

北端，りんご，梅，桑などの樹木でおおわれ，各工場が敷地内に建てられ，それぞれの建物の間には菜，葱畑の畝があって，貧人の目を慰め，心を洗うに足るものだと述べている．記者は彦三二番丁を訪れたようである．図1のように住宅に囲まれた364坪の敷地と隣接する1反の畑は，周辺の家々が10坪余の敷地いっぱいに家と小さい裏庭がある程度で樹木らしきものもなかったから，「花月の世界蛍雪の境涯」にも見えたのであろう．この彦三二番丁には数棟の建物があった．第1棟は炊事場で「倭小にして見る蔭もなく」という建物で，ここで200人弱の炊事をしたとあり，「其の混雑の程思いやらるるなり」と記者は記している．第2棟は陶器製造場で，十数人が従事し，絵具すり，彩色，模様つけなどをし，よく整理され，市内の九谷焼の工場と変るところはない，としている．第3棟は2階建で，1階には木綿機織場，2階は絹糸繰り場である．室内は清潔で主に婦人が従事している．子どものいる婦人は1～3人の子どもを身辺に従えての就労で，時間や就労規則はとくになかったようである．少女も就労している．第4棟は機織場で裁縫場に充てられ，50歳すぎの老女も働いている．仕事はあまりなさそうで，救養場内で使うものを裁縫するのが主な仕事のようであった．その裏に小さい第5棟があり，流行病者が収容されている．さらに第6棟は木工場で，救養場内の死者のための棺柩が造られていた．

記者はこのように各棟の概況を説明し，つづけて「貧天地の一見終りて」太三郎の室に戻ったと記している．太三郎の室は，「形ばかりの門」を入った左の方にある2階建の2階で，「此処が旦那の宅」だと言って記者はそこにいた男に案内されている．その2階は14～5畳ほどの広さで藁筵じき，床にも棚にも一面に夜具の長布，木綿糸類，陶器類が積み重ねてあり，そこで黙々と糸を繰っていたのが太三郎の妻センであった．この室のすみのやや広い所に坐って記者は太三郎から話を聞いている．この1階は染物場であった．この1棟は先述の6棟とは別ともとれ，都合7棟あったとも理解できる．ただこの記述からみると，収容者の居室はこの彦三二番丁にはなかった模様で，太三郎夫妻の宅という2階も事務所兼作業場ではあるが，夜具などの生活用具はなかったようにもとれる．

これは小野救養場の性格に関わる重要なことである．記者も工場と言い，先述の明治27年5月の新聞記事では貧民授産場と言っている．それまでは小野救養場と言い，あるいは単に小野と言っていたのが，27年頃には工場機能をもった貧民授産場となり，その製品を市内で広く販売していたのである．この彦三二番丁以外に5ヵ所以上の建物があり，そこに180人程度が起居し，うち此花町の1棟は精神病者の収容所，中堀川の1棟は小野太三郎，島崎又吉らの居宅であった．ある者は各居所から外に働きに出，あるいは幾輌かあった拾塵車で市内のゴミ集めに出かけ，あるいは飴などの行商にも行き，そして子どももちの婦人やある程度の高齢者も含めて数十人ほどがこの彦三二番丁で働いていた．貧民授産場とはこの彦三二番丁をさすものだったのではなかろうか．

そしてこの授産場の運営や指導を誰がしていたか．陶器づくりは専門の職人を雇っていたようだが，他は太三郎夫婦や収容者中のリーダーが指導にあたっていたのであろう．その意味では一部を除いて不安定な運営体制が続いていたといえる．

この不安定さは財政面でもいえる．安定した収入は年間300余円になる肥料代と，葬儀費用に充てる市内各寺院からの毎月50銭などで，このほかは臨時の寄附金に依っていた．外で就労した者から一定額を除いた残余額をプールして運営費にあてる方式（『小野君慈善録』）についてはまったくふれられていない．また陶器などの販売代金についても言及がない．機織で織った木綿は金沢以外の遠国で売ると言っているが，その具体的内容は尋ねられても答えていない．記者はその太三郎の態度に言うに言えないことがあるのだろうとの推測をして「盤根錯節交々至り，到底規律的の方法を用ひて渡世せんこと

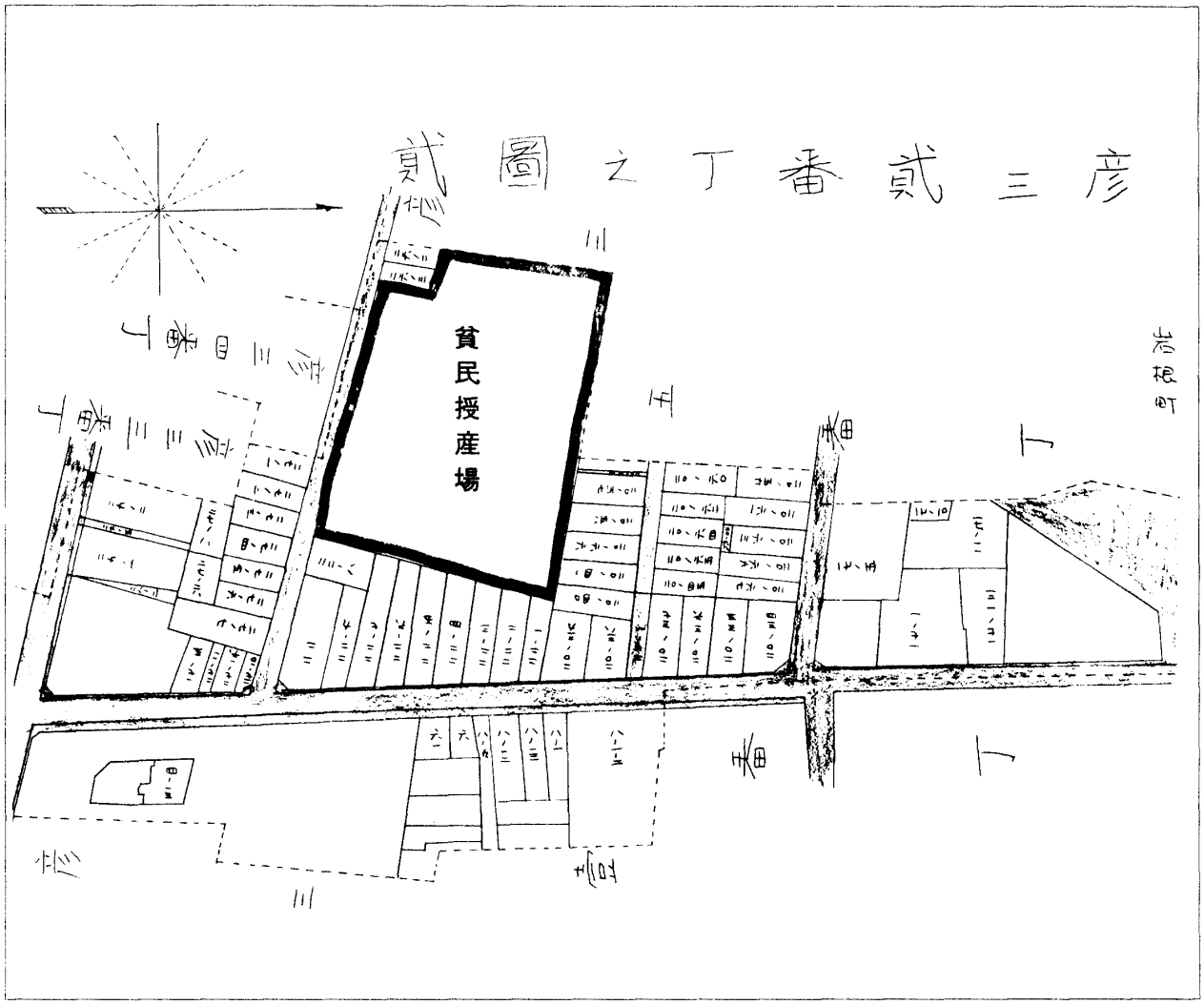

図1　小野救養場（貧民授産場）周辺図

は思いも寄らさる次第なるべし」と困難に同情している．

このような恒常的な経営難に加えて突発的な事態がきわめて大きな打撃を与えている．北国新聞28年7月22日号は木の新保一番丁で真性コレラ病患者が発生したことを伝え，「直ちに同家より左右両側四五軒宛と限りて縄張をなし通行止めとなしたる」という[57]．太三郎が所有する救養場は北側4軒め，5軒め，7軒めであり，縄張りの中に含まれたと思われる．この時に感染したのとは別の時期のことであろうが，「貧天地主小野太三郎氏」の取材中に太三郎はかつてのコレラ病大流行時の困難を次のように語っている[58]．

今に当時を想起してさへ身の冷やかなるを覚えるは，虎病大流行の際，我が貧天地の惨状とその絶体絶命に陥りたることなり，同輩の三分の一は皆枕を列ねて床に就けり，泣く者叫ぶ者，助けを乞い怨を訴ふる声，貧天地を震はしめ真に此世に焦熱地獄を現じたり，警官は予を召換して清潔法の行届かざるを説諭し，一々譴責して寸毫も仮借するなく，左りとて予一人の力三面六臂あるに非らざれば，命に悉く応ひ難かりしなり（中略）予は殆んど眩乱せん

金沢でコレラの流行があったのは明治12年7～8月（県内の死者2万人余），19年6～10月（県内の死者3500人余），28年7～11月（死者94人）で，太三郎が述懐していのるは12年または19年のものであろうか．12年の流行時には恐怖にかられた住民の間で衝突が発生しており，その場所が堀川町であった[59]．小野救養所で患者が発生した時には周辺市民からかなり激しく冷眼視されたであろうことがうかがえる．

コレラ病患者ではないがさまざまな病者が小野救養所で生活していた．貧困者の多くは摂生の心がけのない者が多く，「有らん限り貪食して飽かず叱咤時に鞭撻に至るも頑然悟らざる」状態であった．病者は毎日平均２～３人だが，この時は11～２人とあるのはコレラとも思われる流行病者の発生によっているのであろう．これらの病者の他に「警察署にて処置に持余されたる」癲癇病者や，「到底全復見込なき者にて矢張病院にての持余しもの」である患者が小野救養場に回されてきている．そのため死者が平均して１日１人，多いときで３～４人か５～６人になり，「小野の処へ行けば最早冥途に近づくなり死に行くも同然なり」と小野救養場は忌み嫌われていた．各方面で持て余された人の最後の行き場として小野救養場があったのであろう．ちなみに明治20年代の東京市養育院における在院者死亡状況は，20年129人（前年度繰越人員と新入院者合計中の比25.0%，以下同），23年458人（39.8%），26年258人（23,6%），29年256人(24.5%)となっている[60]．小野救養場ほどではないが，貧民救助事業にとって死亡者の続出がさけられないものであったことがうかがえる．

以上のような小野救養場の状況を北国新聞記者の荘司生はどう評価したのであろうか．１つの事業としてみたときにかなり重大な問題をもっていることは記者も認識し，太三郎も認識していたようである．先に紹介したように敷地内の緑のゆたかさなどは評価しているが，運営方法や処遇方法については大きな疑問を抱いたようである．収容者の人名簿がなく，生活の方法についても「画然たる定規あるにあらず」という状態で，保護結果としての成績も「貧天地より出る者半ば業を得半ば無頼の徒たるべし」と約半数の社会的更生率だったことをあげている．これらに対して荘司生は，適正な慈善事業と不適正な慈善事業に分けて論じている．すなわち不適正なものであれば空閑徒食の惰民を増長させ，罪人隠蔽所となるという．そして極貧人・不幸な者と悪人・罪人を分ける必要を言い，そのために慈恵院，救育院，感化院とは別に監獄や留置場があること，慈善事業がすべてを包摂することには限界のあることを力説している．

ただこの荘司生の意見がすべて妥当しているわけではない．現に金沢には監獄があり警察の留置場もあったが，そこで持て余した者の行き場として小野救養場があったことからすると，問題は小野にあったのではない．金沢社会の中に対象者の特性に応じた各種の救済施設が必要だったのである．しかしそれにしても小野救養場は多くの問題を抱えていた．荘司生は「貧天地の事業未だ不完全を免れざる」として，社会的更生をなす者が半ばにしか達しないことや，経営の方法が「臨機応変たり」ということでは太三郎の死後その慈善事業が「支離滅裂の憂なきか」と，その運営方法の改善を訴え，その責任は太三郎にあるのでなく，「金沢市人全般にあるなり」と断じている．客観的にみて小野救養場の将来について金沢社会の責任と参入を訴えたといえよう．この８回に及ぶ連載記事が単なる視察記事でなく，小野救養場の現状を紹介しながらその改善を求め，その担い手を金沢社会としたところに，小野救養場がこの時すでに自己努力では解決しえない大きな問題を呈していたことの反映がある．

小野太三郎の運営方法では問題の質量がもはや過飽和状態になってきていた小野救養場はこの後どのように推移したのであろうか．北国新聞は29年１月に入って「昨貧天地を訪ふ」との記事を載せている．無署名記事だが，これ以後の一貫した問題提起を見ると，主筆赤羽万次郎のものではないかと思われる．そこでは１月24日現在で収容者が263 人に増加していること，しかしその出身地が県内や金沢の人が少なく外来の人が多い，「アア是れ何等の転倒ぞ」と批判し，さらに続けて慈善事業の適正化を訴えている[61]．

乞丐救養の事固より美や，仁也，唯だ之れに加ふべき二条件を欠かば却て公害あり，蓋し授産監督の二条件を欠きたる救養は徒らに惰民を養成するの悪結果を生ずれば也，小野翁亦た夙に此に留意す．然れども哀々たる貧天

地に於ける微々たる小主人，何ぞ独力にて此の二条件を大成するを得んや，是れ大方の一大助力を要する所以，吾人は当地の人が斯る好問題を閑却せるを異(あやし)むこと深し，

長野県人である赤羽が金沢人の奮起を促し，その力で小野救養場の処遇方法と運営方法の近代化を図ろうとしているのである．北国新聞は3月にも「金沢に於ける最も急要なる問題にして，最も閑却せられ居るものを貧民問題となす」としながら，「吾人は涙ある諸君と倶に，此等の貧民問題を研究せんことを欲す」と再び金沢人によびかけ，自らもこの問題に積極的に取りくむ姿勢を表明している[62]．

これ以後北国新聞はことあるごとに慈善問題とくに慈善事業施設の設立に関する発言を続ける．明治27～28年頃には彦三二番丁を授産場とするなど小野救養場の発展につらなるはずの努力も現われていたが，同時に小野太三郎ひとりではいかんともしがたい運営上の基本的問題を抱え，きわめて大きな困難に直面していた．そしてまたこの問題は多くの識者の目にもはっきりと映るまでになっていた．その困難を社会に訴え，社会の責任分担と参入をもっとも積極的に訴えたのが北国新聞だったのである．このようにして明治20年代の終わりを小野救養場は大きな困難のうちに迎えたのである．

注

1）慈善事業家の受賞第2号は明治29年に藍綬褒章を受けた瓜生いはである（奥寺龍渓『瓜生岩子』四恩瓜生会出版部，明治44年）．

2）社会局社会部『本邦社会事業概要』大正15年，p.52.

3）池田敬正「小野慈善院の成立」『京都府立大学学術報告「人文」』41号，1989年（以下，昭和戦後期の文献資料のみ西暦表記とし，それ以外は元号表記とする．読者の時代把握の便宜のためである），pp.21-54.

4）立花雄一『評伝横山源之助』1979年．pp.53-59.

5）横山源之助「小野太三郎老を紹介す」（上），『北陸政論』明治33年10月23日．

6）山田博光「二葉亭と松原岩五郎・横山源之助」『国文学　解釈と鑑賞』1963年5月号，p.41.

7）彷徨子名の各記事について西田長寿は「孤女学院」記事中に「われ昨は孤女学院を見舞い，今また養育院を訪いて」とあることから，「養育院」記事と同じ筆者ではないかと推測している（西田『日本ジャーナリズム史研究』1989年，p.521）．本稿はこの西田説や立花の見解に依って彷徨子を横山の筆名として行論している．

8）「日本之下層社会」『横山源之助全集』（以下横山全集）第1巻，1972年．pp. 57-58.

9）「社会の観察（其三）」『毎日新聞』明治28年5月12日．横山源之助著，立花雄一編『下層社会探訪集』社会思想社，1990年所収．

10）横山全集，第1巻，pp. 61-64.

11）立花前提書，pp. 141-146.

12）横山源之助「凡人非凡人」横山全集，第3巻，1974年，p.202.

13）立花前提書，p.167.

14）天涯茫々生「北国の二名物」(1)『読売新聞』明治33年1月9日，(2)1月10日，(3)1月16日．

15）同上1月16日．

16）同上．

17）横山全集，第1巻，p.64.

18）天涯茫々生「北国の二名物」(6)『読売新聞』明治33年1月22日．

19）横山源之助「無縁塔建設苦心談（二）」『北国新聞』明治34年1月8日．

20）横山源之助「小野太三郎老を紹介す」（下）『北陸政論』明治33年10月24日．

21）「記念碑建設の計画」『北陸政論』明治33年9月1日．

22）小野太三郎の出生地をめぐっては現在も石川県，富山県の郷土史家の間で綱引き状態の論争がある．まず上田正行氏（金沢大文学部）が「小野太三郎の出生地」（『こだま（金沢大学附属図書館報）』86号，1987年7月）で富山県生れ説を提出，次いで富山県高岡市在住の郷土史家中島正之氏が「小野太三郎出生の謎」（『富山県人』1987年7月号，8月号，9月号）で富山説を示し，金沢市在住でセン夫人の後に嫁いだ小

坂しげの出た小坂家の当主でもある小坂與繁氏が『小野太三郎伝』（1991年，北国新聞社刊）で金沢説を示している．また池田敬正論文は富山説には無理のあることを示している．富山県の地元紙でも「福岡町出身説が浮上」と書いている（『北日本新聞』1987年8月24日）．これら富山出生説の発端となったのが横山の「小野太三郎老を紹介す」である．上田正行氏は『加越能郷友会雑誌』明治34年1月号の記事をあげているが，この記事は横山の記事「小野太三郎老を紹介す」を要約したものである．

23）「北国新聞」明治34年1月8日記事.

24）「記念碑建設の相談」『北陸政論』明治33年10月10日.

25）『北陸政論』明治33年10月12日．ここで「越中出産の人」としたのは，『北陸政論』9月1日の記事を周知であることからすると，太三郎が越中で出生したという狭義の意味でなく，父が越中の出生であることから，広義にとらえて越中出身ということを強調したものであろう.

26）同上紙明治33年10月24日.

27）「無縁塔建設に就て」『北陸政論』明治34年3月5日.

28）東京での運動の実質上の推進者は中村締梁だが，氏の活動母体であった『東京評論』は毎号貧困問題をとりあげ，慰廃園，滝野川学園，留岡幸助などの慈善事業を積極的に紹介している（明治33年10月～34年4月）.

29）立花前提書，p.171．なお立花氏はこの無縁塔を職工事情調査の中で出会った酷使工女事例に対応させているが，小野太三郎との交渉が確認されたので訂正されるものであろう.

30）横山源之助「無縁塔建設苦心談（九）」『北国新聞』明治34年2月4日.

31）これらについては山田明「感化救済事業の組織化における『講習会』の位置」社会福祉調査研究会編『戦前期社会事業史料集成』18巻，1985年．pp.1-28 でもふれた.

32）和田文次郎『小野君慈善録』共潤会，明治23年，p.29など.

33）「小野太三郎翁直筆の文書」『北陸中日新聞』1964年5月24日.

34）「小野太三郎君の略伝」『共潤会雑誌』21号，明治22年2月．pp.28-29．この記事では収容者数は123 名となっている.

35）同上誌，18号，明治21年11月，p.29.

36）同上誌，19号，明治21年12月，p.29.

37）和田前提書，p.20-22．

38）『共潤会雑誌』24号，明治22年5月，pp.28-29.

39）同上誌，28号，明治22年9月，pp.29-31.

40）和田前提書，p.27-28．

41）この和田文次郎は24年5月に共潤会から除名されている．『共潤会雑誌』の38号から41号は未確認のため詳細はわからないが，24年2月発行の42号から表紙，編集人，住所が変っており，編集内容も慈善から離れて文芸調になっていく．雑誌編集の方針をめぐる確執があったのだろうか．結果として小野太三郎の事業は『小野君慈善録』発行頃を最後に，もっとも有力な後援団体を失った.

42）「小野君慈善録の発行に就て」『共潤会雑誌』37号，明治23年7月，pp.1-2．和田文次郎については『市制町村制講義』『府制県郡制註解』などの著書があることのほかはわかっていない.

43）「小野太三郎君の略伝」前掲誌．なお和田前掲書にはこれをより詳細にしたものが載せられている（pp.30-33）.

44）「狂人死す」『北国新聞』明治26年8月17日.

45）「三間県知事の義損」同上紙，明治26年10月31日.

46）「謹告」同上紙，明治26年11月3日.

47）「小野授産場の製品売捌」「開店謹告」同上紙，明治27年5月11日.

48）和田前掲書，p.31.

49）小坂前掲書，p.59.

50）「広告」『北国新聞』明治28年12月12日.

51）「小野太三郎方貧民救恤物品」同上紙，明治27年6月24日.

52）「広告」同上紙，明治28年2月17日.

53）「小野賑恤会」同上紙，明治29年1月31日.

54）「無縁塔建設趣意書」同上紙，明治33年12月22日.

55) 荘司生「貧天地主小野太三郎氏」(4), 同上紙, 明治28年9月12日.

56) 荘司生「貧天地主小野太三郎氏」(1)～(8), 同上紙, 明治28年9月9日, 10日, 11日, 12日, 13日, 14日, 15日, 17日.

57) 「真性虎列刺病市内に発生す」同上紙, 明治28年7月22日.

58) 荘司生「貧天地主小野太三郎氏」(5), 同上紙, 明治28年9月13日.

59) 金沢市史編さん室『市史年表金沢百年 (明治編)』1965年. p.49. p.77. p.113.

60) 東京市養育院『養育院六十年史』昭和8年, 附録p. 3 .

61) 「昨貧天地を訪ふ」『北国新聞』明治29年1月25日.

62) 「金沢貧民問題」同上紙, 明治29年3月4日.